

外国語学習の初期過程における 「明確化」作業の意義と実践

— 知覚文・否定文などを中心として —

Meaning and Practice for Work of “Clarification”
in Early Process of the Study of Foreign Languages

宮 玲子
(Miya Reiko)

Abstract :

The purpose of this thesis is to present the concept of effective “Clarification” work to acquire the foreign language. Moreover, the meaning of the concept is examined, and, in addition, a concrete case is presented. This concept is a method effective to study the course of the introduction, the base, and the beginner’s class in chiefly the first grader of the university or studying a foreign language of the second grader and general language school.

The research object of this thesis is ,so to speak, a different kind synonym. The Japanese term used in a translation is the same word though this is a different word. It can be said that it is one of the factors to obstruct the progress remarkably to meet such a word when the Japanese studies the foreign language.

This thesis assumes “Clarification” work to be a good policy that minimizes the influence of such an obstruction factor and locates it. The content, the case, and the problem of this concept are discussed respectively as follows.

キーワード : 外国語教育、外国語学習、英語学習、韓国語学習、入門・基礎・初級、明確化

Key Word : Education of Foreign Language, Studying a Foreign Language, Study of English, Study of Korean, Beginner’s Course, Clarification

1. はじめに

本稿では、主として大学学部1年次もしくは2年次における外国語学習、または一般の語学学校における入門・基礎・初級の講座学習の過程において、その習得に有効な「明確化 (Clarification)」作業というコンセプトを提示し、その具体的な事例と意義を検討する。ここで問題としているのは、外国語の表記では異なる単語でありながら、それを日本語に翻訳すると同じ訳語になってしまう題材である (異種同義語)。日本人が外国語を学習する際に、こうした異なる単語でありながら同義となる単語や文

章に出会うことは、その学習の進行を著しく阻害する要因の一つであると言える。本稿では、こうした要因の影響を極小化させる得策として「明確化」作業を位置づけ、以下、そのコンセプトの内容、事例、問題点をそれぞれ論じていく⁽¹⁾。

なお、本稿は、あくまでも入門 (極めて初期または低年齢を含む)・基礎・初級レベルの外国語学習や外国語教育の過程における効果的な作業手続きについて論じたものであり、中級以上の学習過程や教育過程を念頭に置いた議論ではない。同時に、外国語学習法や外国語教育法の原理論そのものを論じたものではない。ゆえ

に、筆者の専門もあくまで日本とアジアを中心とする国際関係論や地域研究であり、外国語教育法や英語・韓国語の専門家ではない。したがって、本稿も英語や韓国語の学習や教育そのものを専門的に議論する論文ではなく、筆者の専門である国際関係論や地域研究を学習するための最低限必要の外国語一般の基礎的な習得を目指した提言に過ぎず、その究極の目的はむしろ我々自身の母国語たる「日本語」の技術向上にあることを明記しておく⁽²⁾ 同時に、本稿の議論は、日本語についての語彙不足や簡単な訳ですませようとする意識の低さなどに起因する学習者の混乱への対処法を考案する意義を持っている。

2. 「明確化」作業の意義と手順

ところで、本稿で提示する「明確化」作業というコンセプトは、以下のようなものである。

(手順1)

まず、1枚のカードに①単語Aを使った外国語の例文と、②単語Bを使った外国語の例文を併記し、その横に双方の文章に共通となる日本語の訳語を記す。

(手順2)

次に、その下に文頭を下げて、①'単語Aを使った外国語例文のより詳細な意味を()付きの日本語の訳語として記す。同様に、②'単語Bを用いた外国語例文のより詳細な意味を()付きの日本語の訳語として記す。ここで、()の後に続く訳語は共通であるが、()内に付記する詳細な意味は異なることになる。これが「明確化」の意味である。

(手順3)

最後に、その下に矢印で強調しながら、もう一度双方の外国語例文に共通の日本語の訳語を記す。

〈例題〉

① A文 訳語T

② B文

①' (a) T

②' (b) T

↓

T

正確を期するために、今一度定式化しておく。ここで、上記のダイアグラムにおいて、まず①と②は、2種類の異なる単語を使った外国語の例文を表記したものである(A文とB文)。その右側には、双方の例文における該当単語の日本語訳が記されている(T)。①と②は、異なる単語を使っているにもかかわらず、その日本語訳は共通の同義文となることが理解できる。次に①の外国語例文について、特に②の外国語例文とは異なる単語を使用している部分について、()付きでその詳細かつより正確な語義を理解できるような補足文を付け加え(a)、それに続いて本来表面に出ている日本語の訳語を記す。この()付きの補足文が、当該単語とその他の異種同義語との意味の違いを「明確化」した部分であり、従って、この()付きの補足文を付け加える作業を「明確化」作業と呼ぶ。また、上記の作業を行なった文を①'とする。

同様に、②の外国語例文についても、特に①の外国語例文とは異なる単語を使用している部分について、()付きでその詳細かつより正確な語義を理解できるような補足例文を付け加え(b)、それに続いて本来表面に出てくる日本語の訳語を記す(T)。この部分の作業を「明確化」と呼ぶことはすでに述べた。なお、上記の作業を行って出来上がった文を②'とする。

最後に、①'②'の下段に下向きの矢印を記し、双方の外国語例文に共通の日本語訳語をもう一度記す。これで、「明確化」作業の完成である。こうした1組のペア単語をそれぞれ1枚のカードに記し、それをファイリングしてストックしていくわけである。

ここでは、①と②の外国語例文においては双方とも共通の訳語が該当しており区別のつかない

いペア単語であるものが、①'と②'における（ ）付きの補足文によって、より「明確化」された形で各単語の語義が示され、さらに、リファインされた日本語の訳語ではそれらがあくまでも同義=同じ訳語となることがイメージとして作成者に認識される。こうした作業を繰り返し遂行することにより、初期の外国語学習における重要単語の暗記、他の単語との厳密な意味の違いの理解、その使用法、特に、読解力とともに「作文力」を養うことが期待できるのである。

3. 「明確化」作業の実践例

さて、以上のような意義と手順に基づいて遂行される「明確化」作業について、本章ではその実践例を紹介する。なお、ここで問題としているのは「構文上の問題」ではなく、個々の単語における「意味のズレ」であるため、単語やフレーズの意味内容に不一致があるものの例を挙げることになる。ここでは西洋言語の中から英語、東洋言語の中から韓国語を選び、その事例を作成する。

- ① I must cut my hair. しなければならない。
 ② I have to cut my hair.
 ①' (自分の意志として) しなければならない。
 ②' (他者からの要請によって) しなければならない。
 ↓
 しなければならない。

まず、西洋言語を代表させて英語の事例を見よう。上記の事例について、①および②の文の日本語の訳は同様に「しなければならない」である。しかし、使用している単語の違いにより、より正確な意味はそれぞれ「自分の意志としてしなければならない」と「他者からの要請としてしなければならない」となる。そこで、①'②'にその意味を（ ）付きで記述し、両者の違いを「明確化」する。あとはもう一度最後に訳語「しなければならない」を確認のた

めに付記する。以下、同様の事例をいくつか挙げておく。なお、ここでは「知覚動詞」以外の動詞や形容詞なども含め、重要と思われる基本単語をも利用していることを了承されたい。

(事例1)

- ① They are laughing. 笑う。
 ② They are smiling.
 ①' (声を出して) 笑う。
 ②' (ほほえんで) 笑う。
 ↓
 笑う。

(事例2)

- ① She is beautiful. きれいだ。
 ② She is good-looking.
 ①' (非常に) きれいだ。
 ②' (単に) きれいだ。
 ↓
 きれいだ。

(事例3)

- ① She knows who will come here. 知っている。
 ② She understands who will come here.
 ①' (誰が来るのか) 知っている。
 ②' (事情も含めて) 知っている。
 ↓
 知っている。

(事例3)

- ① They believe that he is. 信じる。
 ② They trust that he is.
 ①' (単に) 信じる。
 ②' (信頼感も含めて) 信じる。
 ↓
 信じる

(事例4)

- ① I hope that you are. 願う。
 ② I wish you are.
 ①´ (可能なことを) 願う。
 ②´ (不可能なことを) 願う。
 ↓
 願う。

(事例5)

- ① He mistook. 間違えた。
 ② He errored.
 ①´ (物理的に) 間違えた。
 ②´ (道徳的に) 間違えた。
 ↓
 間違えた。

(事例6)

- ① She admitted her mistake. 認める。
 ② She recognized her mistake.
 ①´ (いやいやながら) 認める。
 ②´ (事実として) 認める
 ↓
 認める。

(事例7)

- ① They looked at my car. 見る。
 ② They watched my car.
 ①´ (単にチラと) 見る。
 ②´ (意図があつて) 見る。
 ↓
 見る。

(事例8)

- ① You refused the plan. 拒否する。
 ② You rejected the plan.
 ③ You declined the plan.
 ①´ (普通に) 拒否する。
 ②´ (強く) 拒否する。
 ③´ (少し弱めに) 拒否する。
 ↓
 拒否する。

(事例9)

- ① He has a talent. 能力。
 ② He has a bility.
 ③ He has a capacity.
 ①´ (生来の才能という意味の) 能力。
 ②´ (実現力があるという意味の) 能力。
 ③´ (現在持っている) 能力。
 ↓
 能力。

次に、東洋言語を代表させて韓国語の事例を見てみよう⁽⁴⁾。なお、先述したように、ここでは「構文上の問題」ではなく単語の「意味のズレ」を問題としているため、個々の例文の文脈上の説明はできるだけ簡略化していることをご了承されたい。

- ① 못 먹어요. 食べません。
 ② 안 먹어요.
 ①´ (食べられないから) 食べません。
 ②´ (食べたくないから) 食べません。
 ↓
 食べません。

上記事例6について、英語の場合と同様にして、①および②の日本語訳は「食べません」である。しかし、使用単語の相違により、より正確な意味はそれぞれ「食べられないから食べません」と「食べたくないから」となる。そこで、①②´にその意味を()付きで記述し、双方の違いを「明確化」した後、確認のために訳語「食べません」を付記する。以下、同様の事例をいくつか挙げておく。

(事例1)

- ① 못 가요. 行きません (または「行けません」)。
 ② 안 가요.
 ①´ (行きたいけど) 行きません (行けません)。
 ②´ (行きたくないから) 行きません。
 ↓
 行きません (行けません)。

(事例2)

- ① 공부 못해요. 勉強しません。
- ② 공부 안해요.
- ①' (勉強したいけど) 勉強しません。
- ②' (勉強したくないから) 勉強しません。
- ↓
- 勉強しません。

(事例3)

- ① 못 읽어요. 読みません。
- ② 안 읽어요.
- ①' (読みたいけど読めないから) 読みません。
- ②' (読みたくないから) 読みません。
- ↓
- 読みません。

(事例4)

- ① 올 수 없어요. 来ません。
- ② 안 와요.
- ①' (来たいけど来られないから) 来ません。
- ②' (来たくないから) 来ません。
- ↓
- 来ません。

(事例5)

- ① 운전 못해요. 運転しません。
- ② 운전 안해요.
- ①' (運転できないから) 運転しません。
- ②' (運転したくないから) 運転しません。
- ↓
- 運転しません。

(事例6)

- ① 놀 수 없어요. 遊びません。
- ② 안 놀아요.
- ①' (遊ぶことができないから) 遊びません。
- ②' (遊びたくないから) 遊びません。
- ↓
- 遊びません。

(事例7)

- ① 보낼 수 없어요. 送りません。
- ② 안 보내요.
- ①' (送ることができないから) 送りません。
- ②' (送りたいくないから) 送りません。
- ↓
- 送りません。

(事例8)

- ① 부를 수 없어요. 呼びません。
- ② 안 불러요.
- ①' (呼ぶことができないから) 呼びません。
- ②' (呼びたくないから) 呼びません。
- ↓
- 呼びません。

なお、より具体的には、以上のような「カード作成」の作業を外国語の「購読」の講義で登場する重要単語について逐一学習者に行わせることが、当該学習者の技術向上に資するものと考えられる。さらには、それらの単語を使った簡単な作文を宿題として提出させ、「読む」だけでなく「書く」ことの技術向上をはかることも重要である。

4. おわりに

(1) 要約

本稿の要約は以下のとおりである。

- ① 大学学部 of 1・2年次または語学学校の入門(極めて初期または低年齢を含む)・基礎・初級レベルにおいて外国語を学ぶ際に、より詳細には語義が異なる単語でありながらその日本語訳が同一になってしまう単語の存在は、学習の進展に大きな障害となるものである。
- ② 上記の「異種同義語」の習得を補助する効果的な学習手法として「明確化」作業を提示したが、これは、初期の外国語の学習過程において各単語の意味を正確に区別して把握するための手法として有効である。
- ③ 上記「明確化」作業の事例として、西洋言

語からは英語、東洋言語からは韓国語を選び、否定文などを中心として、その具体例を紹介した。

(2) 課題

本稿の課題は以下のとおりである。

- ① 「明確化」作業はもともとネイティブ教員とノン・ネイティブ教員の双方の教育効果を補完する橋わたしの手法としての意義を有するため、筆者のような外国語の「学習者」ではなく、より専門的な外国語の「教育者」による研究成果が期待される。
- ② 「明確化」作業は手間のかかる学習作業であるため、その簡略化も視野に入れた改善が必要であるが、もともと語学学習はこうした手間をかけて積み上げていくことで効果を期待できる分野であるから、その意味を学習者によく説明し、理解させる必要がある。
- ③ 上記の課題に対処するため、講義担当者には講義内容改善のための持続的な努力が要請される。

【注釈】

- (1) 一般的な外国語教育法や外国語学習法に関する代表的な文献として、石橋（1991）、佐伯（1992）、竹内（2003）などが挙げられる。特に、近年における科学的な研究成果としては、白井（2008）などを見よ。
- (2) 日本語教育法に関する文献として、藤井（1995）などを参照。また、本稿と同様の問題意識に基づいた研究成果として、迫田（2002）などが挙げられる。
- (3) 英語教育法に関する文献として、小寺・吉田（2005）や村野井（2006）などを参照。
- (4) 韓国語教育法に関する文献として、木内（2004）などを参照。

【参考文献】

- 石橋幸太郎『外国語教育』（成美堂、1991年）
 小寺茂明・吉田晴世『英語教育の基礎知識』（大修館書店、2005年）
 木内明『基礎から学ぶ韓国語講座・初級』（国書刊行会、2004年）
 佐伯智義『科学的な外国語学習法』（講談社、1992年）
 迫田久美子『日本語教育に生かす第二言語習得研究』（アルク、2002年）
 白井恭弘『外国語学習の科学』（岩波新書、2008年）
 竹内理『より良い外国語学習法を求めて』（松柏社、2003年）
 藤井茂利『日本語教育法研究』（近代文芸社、1995年）
 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』（大修館書店、2006年）
 J. Dietrich and M. M. Kaiser, *Writing: Self Expression and Communication*, Harcourt College Publishers, 1989.
 B. Johnstone, *The Linguistic Individual: Self-Expression in Language and Linguistics* (Oxford Studies in Sociolinguistics), Oxford University Press on Demand, 1980.